



# さいたま岩槻キャンパスにおける 「埼玉県車いすテニス協会との連携」を 教育に活かす試みを考える



## 1.

### はじめに

2022年現在、目白大学さいたま岩槻キャンパスで実施している地域連携・研究推進センター事業（以下：地域連携事業）「埼玉県車いすテニス協会との連携」は2016年にスタートして7年目を迎えた。現在は当たり前の日常として車いすテニスプレーヤーがキャンパスのテニスコートで活動をしている。長く連携を続けてきたことにより様々な教育への協力の取り組みがなされてきた。

ここではその経緯を振り返り、医療系キャンパスであるさいたま岩槻キャンパスにおける地域連携事業を教育に活かす可能性について考えていきたい。

## 2.

### 2016年度SPISチャレンジとして スタート

筆者（スポーツ・健康科目担当）と共同著者の仲本（テニス部顧問）はテニスコートを部活や授業以外に活用する方法はないかと日頃から考えていた。また、キャンパスを障がい者が日常的に行き交う光景への憧れも共有していた。そこで2人が同時に学生委員になった2016年にSPISチャレンジ制度<sup>1)</sup>を活用し、学生と一緒に大学テニスコートに車いすテニスプレーヤーを誘致する企画を立てた。この時、何の伝手もなかったが、地元であるという理由から埼玉県車いすテニス協会のHPにメールを送り、協力を依頼した“飛び込み営業”からこの取組は始まった。

SPIS チャレンジではテニスコートを車いすテニスプレーヤーが活動できるように出入り口の改造やスロープの設置など、すべてを学生とともに手作業で実施した。月1回の練習会を続けて交流を重ね、11月に「車いすテニス体験交流会」を開催した。開催までにスポーツサポーター研究会(以下:SS研究会)の協力を得た。SS研究会は理学療法学科の工藤裕仁教授、小川大輔准教授が顧問を務め、主に理学療法学科の学生で構成される部活動である。地域のスポーツ団体やイベントにトレーナーやサポーターとして携わることで、スポーツリハビリテーションに関する多くの経験を積み、3・4年次の臨床実習や将来の理学療法現場での活動に活かすことを目指している。一般のイベントでは障がい者の身体に触れる経験はできない。また病院実習ではスポーツに取り組むアスリートに出会うことはないため本活動は学生にとって貴重な経験の機会になった。

イベント当日は車いすプレーヤーと、健常プレーヤー、SS研究会メンバー、SPIS チャレンジ企画学生が混在するチームとなり団体戦を実施した。残念ながら悪天候のため全ての試合を消化することはできなかったが、全体で50名近い参加がありイベントとしては成功と評価できた。目白大学と埼玉県車いすテニス協会はお互いにその後も関係を継続したいと意見が合致し、筆者が埼玉県車いすテニス協会総会へ参加することで翌年度以降

の連携について話し合った。

### 3.

## 2017年度「地域連携・研究推進センター事業」として継続

2017年度からは継続可能な地域連携・研究センター岩槻分室事業「埼玉県車いすテニス協会との連携～障がい者スポーツ支援と教育協力～」として活動することになった。主な活動は①月1回の目白大学テニスコートでの定期練習会、②パラリンピックを目指すなど競技力が高い車いすテニスプレーヤーの平日練習支援、③協会主催「彩の国 川越水上公園車いすテニス大会」へのボランティア協力、④目白大学テニスコートでの交流大会開催、の4つを計画した。定期練習会にはSS研究会の学生も参加して定期的にコンディショニングを経験した。6月に開催された「彩の国 川越水上公園車いすテニス大会」にもコンディショニングブースとボールパーソンとして学生36名が参加した。2日間でのべ88名の選手やボランティアスタッフなどがコンディショニングブースを利用した。

この年、目白大学新聞43号「車いすテニスプレーヤーとのナイスマッチ～アスリートと学生が協力し学び合う～」に活動内容が詳しく掲載された<sup>(1)</sup>。記事の中でSS研



SPIS チャレンジ 車いすテニス体験交流会の集合写真

(2016年)

研究会代表としてコメントを述べた五十嵐登夢さん（当時理学療法学科3年）は卒業後に埼玉県車いすテニス協会の賛助会員となり、現在も練習会に参加し、後輩のSS研究会を支援するなど、頼もしい存在となっている。

10月には「S.W.T.A Meji Cup」と称したイベントを計画した。車いすテニスプレーヤー、目白大学教員、学生、地域テニスプレーヤー、SS研究会から40名程度が参加する予定だったが、台風によりやむを得ず中止となった。

## 4.

### 2018年度「地域連携・研究推進センター事業」として2年目

2018年度に計画した活動と成果について報告する。

#### ①目白大学テニスコートでの定期的な練習会と車いすテニス体験会

地域テニスプレーヤーのボランティア参加も多くなり、車いすテニスプレーヤーとダブルスを組むニューミックスのゲームもたくさん実施されるようになった。筆者らが間に入らなくても互いの交流が自然と生まれていくことを実感した。参加した学生たちも車いすテニス体験を行った。また疾病により歩行困難となったテニス愛好家から「車いすテニスを体験してみたい」との連絡があり、埼玉県車いすテニス協会に体験を依頼した。埼玉県車いすテニス協会と新たな車いすプレーヤーをつなぐ役割を初めて実現できた機会となった。その後、この愛好家は定期的に活動に参加するようになった。

#### ②目白大学テニスコートで交流イベントの開催

12月にニューミックスゲームイベント「1th S.W.T.A Meji Cup」を開催した。車いすプレーヤー10名、学生2名、教職員5名、地域テニスプレーヤー7名が参加した。運営には学生ボランティアが協力してくれた。残念ながら降雨のため途中打ち切りとなったが参加者からは次回開催を希望する声が聞かれた。

#### ③平日のプレーヤー支援

埼玉県車いすテニス協会会長の菅野浩二選手が2020東京パラリンピック日本代表候補になり、TV取材「BS日テレストロングポイント」を目白大学テニスコートで

行った。また車いすテニス日本代表チームの中澤吉裕監督が練習会に参加したこともあり、その日のメンバーにとっては集合写真とともに良い記念になった。

#### ④協会主催「彩の国 川越水上公園車いすテニス大会」にコンディショニングブース参加

SS研究会を中心に学生32名がボランティア参加した。コンディショニングブースの運営とボールパーソンを担当した。

#### ⑤埼玉県車いすテニス協会に授業協力の打診、検討

車いすプレーヤーに学生の教育に協力してもらおう機会を検討したが、専門科目ではすでに授業内容は計画されているためすぐに実現することはできず、筆者が担当するスポーツ・健康授業「テニス」に参加してもらい、基本的なテニスの技術指導や、車いすテニス体験などを実施するにとどまった。

筆者が今後の定期的な協力体制の構築に向けて埼玉県車いすテニス協会の賛助会員となった。

## 5.

### 2019年度「地域連携・研究推進センター事業」として3年目

活動計画は2018年度と同様であった。

#### ①目白大学テニスコートでの定期的な練習会と車いすテニス体験会

積極的にニューミックスのゲームが実施され継続してきた効果が実感できた。しかしながらSS研究会の学生以外の参加がなく、一般学生の参加をどう促すかが課題となった。

#### ②交流イベントの開催

日程の調整ができず開催を見送った。

#### ③平日のプレーヤー支援

安定した運営ができていた。しかし競技力の高い選手はパラリンピック強化指定選手になるなど、ナショナルチームの練習が増えるため目白大学テニスコートでの練習会参加が困難になった。強化指定選手にならないままパラリンピックを目指している車いすテニスプレーヤーもいるがパラリンピック後も見据えて、今後の活動目的

を、例えば車いすテニスの普及や交流機会の拡充へシフトするなど、検討していく必要性を感じた。

#### ④協会主催「彩の国 川越水上公園車いすテニス大会」にコンディショニングブース参加

例年通りの準備をしていたが台風の影響で中止となった。

#### ⑤埼玉県車いすテニス協会メンバーの授業協力の打診、検討

継続して筆者が担当するスポーツ・健康授業「テニス」に協力してもらった。作業療法学科の教員に相談し、2020年度「義肢装具学」の授業協力を検討していたが、新型コロナウイルスの影響で先行きが見えなくなったため一旦白紙となった。授業外ではこの年のSPISチャレンジ企画「自助具の作成」を行っていた作業療法学科学生による障がい当事者のニーズ調査に協力してもらった。

2019年度2月最終週から新型コロナウイルスの影響により練習会を中止とした。

## 6.

### 2020年度「地域連携・研究推進センター事業」として4年目ーコロナ禍での活動再開

コロナ禍により春学期の授業が全面遠隔となり、緊急

事態宣言が解除されるまでは本活動も完全に休止した。解除に伴い、感染防止対策をまとめた稟議書を提出し活動再開の承認を受けた。ただし、入構制限が解除されるまで学生の参加は見合わせることになった。平日練習と定期練習会を再開したが、埼玉県車いすテニス協会が毎週使用していた練習テニスコートは医療施設内のため使用制限がかかり全く使えない状態となっていたため事実上協会の練習場所は目白大学テニスコートのみとなった。そのため定期練習会は月2回と例年より設定を増やした。協会員からはいち早く活動を再開したことについて感謝の言葉をいただいた。久しぶりの練習会では参加者全員テニスができる喜びを感じていた。コロナ禍での障がい者の活動場所は健常者に比べて厳しい制限がかかる現実を知る機会となった。

交流イベントは実施を見送った。また埼玉県車いすテニス協会主催「彩の国 川越水上公園車いすテニス大会」も実施が見送られた。

2020年度は遠隔授業が主になったことで計画していた作業療法学科の授業協力は前述の通り一度白紙になったが、協会員から使わなくなった義肢装具の提供があり作業療法学科の担当教員に引き渡した。筆者が担当したスポーツ・健康授業も1年を通して全面遠隔授業（オンデマンド）となる中で、実際にプレーする動画を紹介したり、筆者自身がウェアラブルカメラを装着し、車いすでのプレーを疑似体験する動画も紹介したりした。また



ら・みやびに掲載された写真

(2020年)

学生から車いすテニスプレーヤーへの質問を募り、その質問に回答してもらうという内容も実施した。例年よりもじっくりと車いすテニスの紹介ができ、学生たちからも多くの質問が寄せられたためパラリンピックへ向けて興味関心を寄せる良い機会になったと感じた。

本活動について2021年3月の岩槻区地域誌「ら・みやび」の大学寄稿コーナーで紹介する機会がありこれまでの取組を紹介する記事を書いた<sup>(2)</sup>。

## 7.

### 2021年度「地域連携・研究推進センター事業」として5年目ー東京パラリンピック開催

2021年度は2020年度に引き続き本活動の感染対策に関して稟議書を提出し、承認を受けて実施した。平日練習と定期練習会については安定した運営ができ連携継続の効果を感じた。入構制限の緩和に伴い学生参加募集を行ったが残念ながら1年間を通して全くなかった。サークル等の活動制限が継続されている中ではこうした授業外への活動参加も積極的になれなかったと思われた。また学生にとって縦の交流機会が失われているため先輩か

らの情報がないことも影響したかもしれない。学生参加が活動の大きな課題となっている。

目白大学テニスコートでの交流大会と埼玉県車いすテニス協会主催の「彩の国 川越水上公園車いすテニス大会」は開催が見送られた。

1年延期となった東京2020パラリンピックに埼玉県車いすテニス協会より代表に選ばれた選手たちがいた。特に菅野浩二会長は目白大学テニスコートで練習も行っていた選手で我々にとっても思い出が深かった。菅野選手はクアードダブルスで見事この種目日本人初の銅メダルを獲得した。菅野選手は10月にオンラインで開催された第28回桐祭の特別企画「パラリンピック選手へのインタビュー」に出演した。その際に前述したSS研究会OBの五十嵐さんもゲスト出演した。残念なのはコロナ禍となり菅野選手と直接接したことがある学生に限られていたことである。たくさんの学生が菅野選手のことを知っていれば東京パラリンピックももっと身近に感じたであろうし、特別企画も盛り上がったであろうと思ひ悔やまれる。また東京2020パラリンピックに関しては無観客開催となったためボランティア参加の機会がなくなった。活動を始めた当初はこの活動を通して障がい者スポーツに関心をもった学生たちが様々なボランティアに参加するという目標を持っていたが実現することはな



メダルをかけて2ショット撮影する筆者

(2021年)

かった。

大会後に菅野選手は海外遠征が続き目白大学テニスコートに来る機会がなかったが、日頃練習会に参加しているパラリンピアンのご縁で東京2020パラリンピックの銀・銅メダリスト上地結衣選手が平日練習会に参加した。メダリストとテニスができるとあって参加者たちは興奮気味で、トップ選手でありながら気さくにサインや記念撮影に応じてくれる上地選手の人柄にあっという間に皆ファンになった。

授業協力に関しては筆者担当のスポーツ・健康は対面授業を再開したためテニスの時間に協会員に協力を依頼し参加してもらった。対面授業が多く再開されたので改めて授業協力の可能性がないか各学科の教員たちに打診した。

東京2020パラリンピックが終わり、今後の連携の目的に関して新たに検討する時期になった。

## 8.

### 2022年度 —教育活動への活かし方の模索

2022年度は本活動の目的を普及、交流にシフトしていくことと、学生教育への協力を実現することとした。埼玉県車いすテニス協会と長く連携を続けてきたため関係性は構築できており、協力については前向きな回答が得られた。

平日練習会は毎週木曜日の午前中に実施を継続している。今後の課題はこの時間に学生や地域テニスプレーヤーの参加を増やすことだと考えている。

定期練習会は月2回のペースを保っている。目白大学テニスコートでの練習会が埼玉県車いすテニス協会の公式練習会として位置づけられた。今後は地域テニスプレーヤーへの告知を行い、新たな参加者への普及、交流の機会を作っていくことが課題となる。そして練習会に参加した地域テニスプレーヤーを中心に目白大学テニスコートで交流大会を再開することが大きな目標である。

今年度は作業療法学科佐藤彰紘准教授と廣瀬里穂助教が担当する「運動学実習」において埼玉車いすテニス協

会員2名が授業協力者として参加した。ようやく専門科目での授業協力が実現した。また作業療法学科のゼミ活動「インクルーシブ・ソサエティ作業療法コース：誰も取り残されないための作業療法を考える」の一環で車いすテニスプレーヤーとその家族へのインタビューも実施された。

言語聴覚学科教員が取り組む研究の被験者として定期練習会に参加する埼玉県車いすテニス協会のメンバーが協力した。

また、関東車いすテニス協会から「車いすテニスを支えている人たち」というHP記事の取材依頼があり筆者がインタビューを受けた。本学のように連携が長く続くケースは珍しいとのことであった。

10月22、23日には4年ぶりに埼玉県車いす協会主催の「彩の国 川越水上公園車いすテニス大会2022」が開催された。SS研究会の学生は都合が合わず参加できなかったがOB達が協力しフィジオブースを設置した。また筆者は選手として大会（ダブルスBクラス）に参加した。

これまでの連携が継続していることでお互いの様々な事業への協力が行われるようになってきた。今後はさらに本学教育活動への活かし方を検討していきたい。

例えばさいたま岩槻キャンパスであれば理学療法学科や作業療法学科の専門科目で様々な可能性があるのではないだろうか。義肢装具に関わる授業、車いすに関わる授業では実際に利用している人の観点からの話やデモが可能となる。また身体に直接触れる授業に関しても実際に障がいがある車いすテニスプレーヤーに触れることができれば健常者の模擬患者とは違った学びが深まるのではないだろうか。また障がいの有無にかかわらず、他者と関わる機会はコミュニケーション演習などへの活用も可能ではないだろうか。

そして研究分野への協力の可能性も考えられる。教員のそれぞれの研究だけではなく学生の卒業研究などで関わることもできるのではないかと。

最後に地域連携事業で学生たちが車いすテニスプレーヤーと関わる意義について考える。学生が大学生活の中で臨床実習以外で障がい者と接する機会は決して多くはない。そして実習では患者の身体に触れることには厳しい制限があることも多いが、先に紹介した目白大学新聞

の記事で菅野会長は「どんどん触って練習してほしい」と述べたように制限なく練習することが可能である。また臨床実習は単位取得がかかった授業であり、評価に直結してしまうため心理的に踏み込みにくい一面があるのではないかと考えられる。しかしながら地域連携事業の活動において評価される側面はない。そういった制約のない状況下でのコミュニケーション場面は授業とは違った経験になると考えている。

先に述べたように学内に車いすテニスプレーヤーがいることが当たり前になることが理想で、学生や地域の人々が車いすテニスプレーヤーと触れ合う場を今後作っていきたいと考えている。何かしらの教育場面での活用が可能であればぜひご連絡いただけたら幸いである。今回はさいたま岩槻キャンパスに絞って考察したが新宿キャンパスにおいても可能な連携があればぜひ筆者までご連絡いただきたい。

## 謝辞

この活動にご協力いただいている埼玉県車いすテニス協会構成員、ボランティアプレーヤーの皆様にご心より感謝申し上げます。

櫻井健太

sakurai@mejiro.ac.jp

## 註

- 1) 「SPIS(スパイス)」とは「Students Project Incentive Scholarship」の略。好奇心旺盛な学生にそれぞれが抱えている夢の実現にチャレンジしてもらおうと、資金の一部を大学が支給する制度。在学生(大学院生も含む)なら、個人・団体を問わず誰でも応募できる。ただし、応募企画の内容は単なる趣味的なものに終始するのではなく、社会性があり、地域社会に貢献できるものであることが条件。実行する場所は学内外、国内外を問わない。独自性、社会性、計画性、熱意、教育的効果などの点から審査し、上限50万円までの範囲内で奨励金を支給する。

## 引用資料

- (1)「車いすテニスプレーヤーとのナイスマッチ～アスリートと学生が協力し学び合う～」目白大学新聞43号2017年8月

[https://www.mejiro.ac.jp/univ/course/social/mu\\_journal/pdf/mujrnl\\_43.pdf](https://www.mejiro.ac.jp/univ/course/social/mu_journal/pdf/mujrnl_43.pdf)

- (2)「目白大学の取り組み 埼玉県車いすテニス協会との連携」ら・みやび2021年3月

<https://iwatsuki.raunzi.com/%e9%80%a3%e8%bc%89%e3%83%bb%e5%af%84%e7%a8%bf/%e7%9b%ae%e7%99%bd%e5%a4%a7%e5%ad%a6%e3%81%ae%e5%8f%96%e3%82%8a%e7%b5%84%e3%81%bf-%e5%9f%bc%e7%8e%89%e7%9c%8c%e8%bb%8a%e3%81%84%e3%81%99%e3%83%86%e3%83%8b%e3%82%b9%e5%8d%94%e4%bc%9a%e3%81%a8%e3%81%ae>